

池島勘治郎作品調査研修についての報告書

大阪新美術館建設準備室 外部研修生
本島翔志

はじめに

2018年8月に実施された本研修では、2021年に開館予定の大阪新美術館が所蔵する池島勘治郎に関する資料、作品を整理することが主な目的であった。池島勘治郎は1897年に大阪市南区に生まれ、水彩画家として独立展などで活躍した人物である。没後に遺族から寄贈された資料、作品が大量に保管されている。それらについて、ある程度は整理、調査等がなされていたが、不十分な点が残っていること、新美術館で池島作品を展示することも加味し実施されたのが本研修である。

本研修に参加した動機

私が本研修に参加した動機は二つある。一つ目は、数年前に他界した祖父の作品が経年劣化や損傷が激しいため、作品調査に携わってみたい思いがかねてよりあったからである。私の母方の祖父は生前画家であり、没後は200点ほどの遺作が保存環境の良くないマンションの一室に無造作に置かれたままという状況にある。そのため、中には損傷の著しい作品もあり、2018年10月には展覧会を控え、どれほどを出展できるのかという危機感もあった。なお、作品の管理等は現在母が行っているが、のちのちは私がこれらを引き継ぐことになっている。そこで、将来十分に対応できるよう、少しでも知識を得ておきたいという思いがあったからである。

二つ目は、大阪市が新美術館を整備するにあたり、所蔵する作品をどのように整理、調査しているのかに興味を抱いたからである。新美術館は構想以来34年という長い年月が経っており、インターンシップで美術品を扱うことを通して、多岐にわたる業務の内容を知る良い機会になるというのが私の考えである。

本研修で池島勘治郎作品整理を希望した理由として、祖父と境遇が似ていることがあげられる。池島は大阪大空襲の際に大切な作品を失ったが、祖父も自宅火災によってそれまでの作品のほぼすべてを焼失してしまった。また、両者ともに独学で美術を学ぶなど、水彩画と油絵という違いはあれども、いくつかの共通点がある。以上の理由により私は、池島作品の学芸業務研修を選択した。

研修内容

第一日目（8月21日）

・池島氏の作品・資料を棚から出し、段ボールの外枠があるものはそれをカッターで切って外す→資料冊子と照らし合わせる（作品名、番号等）→裏面記載事項を確認（制作年月日、関西独立展・河内個展などの個展名、作品名、池島勘治郎の署名等）し、間違っていれば修正する→縦横の長さを測る（外枠があればそれも）→作品の状態を調書【4,5頁の図を参照】に書く（破れ、折れ、剥落等）→元に戻す

※上記一連の作業を以下「第一日目作業」という。

- ・倉庫内の他の収納部屋を見学

第二日目（8月22日）

- ・第一日目作業の続き

（・作業後、新美術館建設予定地とプーシキン美術館展（国立国際美術館）視察のため）

第三日目（8月24日）

- ・貸出作品の状態確認
- ・第一日目作業の続き

第四日目（8月28日）

- ・第一日目作業の続き
- ・パネルと一緒に保管されていた作品の状態確認

第五日目（8月29日）

- ・第一日目作業の続き（厚紙を折りたたんで保管されているものを含む）

研修を通しての感想

まず感じたのは、自分の美術に関する知識のなさである。私は美術に関しては全くの素人なので致し方ない面もあるが、後から述べる作品の取り扱い方については自分の知識不足を実感した。それ以外にも、マット装等により実際の作品の大きさと美術館で展示される際に観られる大きさが異なっているということや、作品にかぶせる保護紙に裏表があること、日本の美術館は作品を箱に梱包する際に画面が同じ方に向くようにするという風習があることなど、新たに得た知識は非常に多かった。研修中に作品を調査する中で得られる知識もあった。例えば、裏面に池島が出品した個展名が記載されている作品がいくつかあったが、そのほぼ全てが「関西独立展」か「河内個展」のどちらかであった。そこから、池島が関西を中心に活動していたことや、これら二つの個展に重点的に出品していたことが分かった。なお、作品の裏面記載事項を転記する際には極めて正確性を要した（年月日が漢数字で書か

れているか、算用数字で書かれているか)が、それは正確な情報を後世に伝えるとともに、文字、数字の使い分けによる作者の個性や時代背景、作品に対する思いなどを表現しているためだと考える。他にも、作品のサイズを測る際に本紙寸と作品寸の両方を採寸したが、これは作品として美術館等で展示する場合に重要となる。すなわち、展示の際にはマット装や額縁が必要となり、作品に合わせたそれらを用意するには採寸は不可欠である。また、前述した、実際のサイズと美術館で観られるサイズが異なるという点にもこれは活かされていると考える。

これほど同じ画家の作品を観るということは祖父の作品以外になかったため、池島の作品に愛着を持つよい機会となった。それとともに、良いと感じた作品はどこが良いのかを、作業を進める中で考えるという機会にもなった。5日間の研修を通して私が出した結論は、一見(3秒程)しただけでは何が描かれているかわからないが、じっくりとその作品に向き合っていくことによって、何が描かれているかがわかるような作品が良い作品であるというものである。例えば、リンゴを描くにしてもただ単純にリンゴを描くのではなく、制作当時の時代背景など、リンゴ以外のものをうまく用いながら(タッチなど)リンゴを表現しているというものである。このような、ストレートではなく回りくどさを兼ね備えた作品が良いと、池島作品やプーシキン展を通して感じた。そして、この経験は将来活かせるものだと感じた。

美術作品は慎重・丁寧に、繊細な作業が求められるということは、祖父の作品に触れていたことからある程度は認識していた。しかし今回、例えば画面に触れぬようになるべく淵を持ち、デリケートな作品の場合には手袋をするなど、前述のような取り組みへの姿勢が重要であると改めて認識するに至った。三日目あたりで作品を丁寧に扱うということにも慣れてきたが、同時に作品の状態維持の重要性にも気づいた。取り扱ったものの中に「これはいい作品だ」と感じるものがあったとしても、折れや破れなどの損傷が激しければその分見劣りしてしまうことが何度もあり、実際、これらをそのままの状態でも美術館に展示する作品とするのも難しいという。また、「開拓使」というシリーズ作品を研修中に取り扱ったが、その作品については特に劣化、損傷が激しいと感じた。室温が18℃程度に常に保たれてセキュリティも万全であり、かつ、学芸員の方々が取り扱ってそのような状態なのであるから、祖父の作品がいかに劣悪な環境に置かれているかということを経験を通して痛感した。ただ、今回の研修で作品の保管・整理方法については非常に多くの知識を身をもって得ることができたため、改めて祖父の作品に今までとは違う新たな視点で向き合いたい。

数多くの池島作品を整理・調査してきたことで、微力であるかもしれないが、大阪新美術館のプロジェクトに貢献していると感じることができた。そのこともあって新美術館の開館が今まで以上に楽しみになり、美術館、池島作品の両方に愛着心も沸いた。学芸員とともに作品に直に触れることで大阪市なら安心して任せられるという信頼のもとで作品が寄贈されたことを理解するに至った。本研修で感じた以上のことを、今後の仕事や人生の糧としたい。



图 1

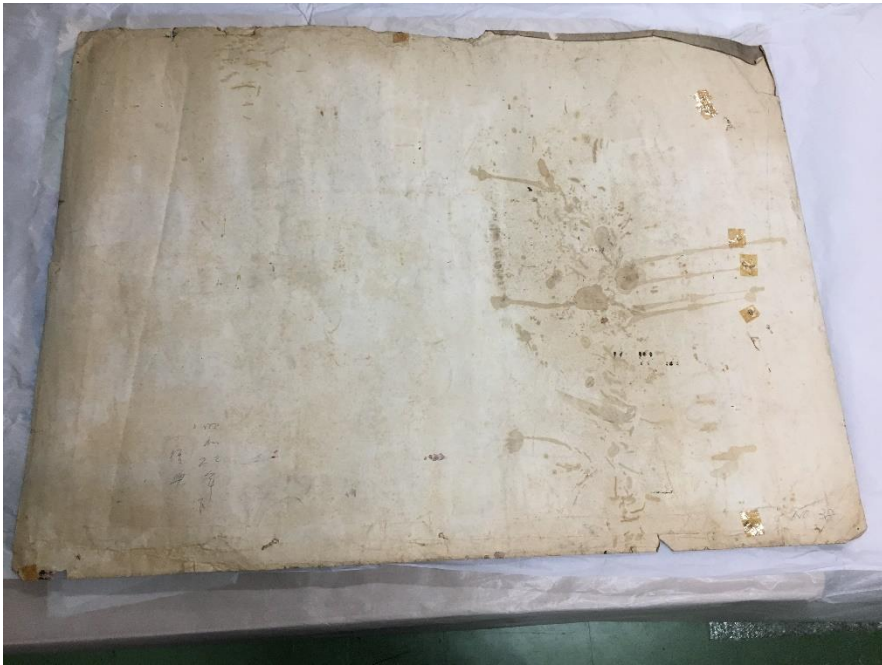


图 2

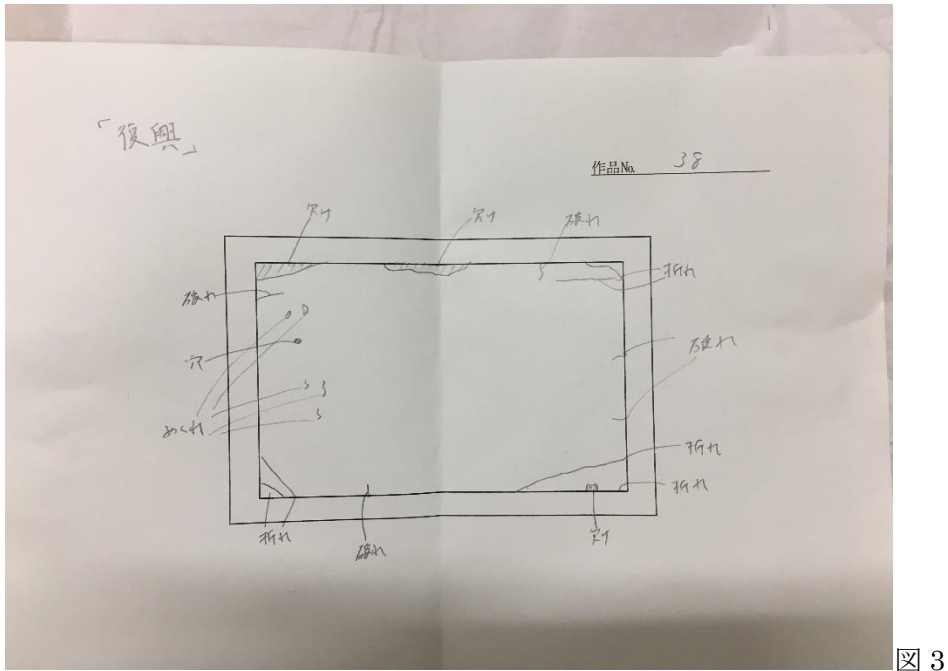


図 1 : 調書の対象となった池島作品「復興」表面

図 2 : 裏面

図 3 : 作品調書

作品名：『復興』 作家名：池島勘治郎 制作年：1947年 材質・形状：グワッシュ、紙
 寸法 (cm)：縦 78.7×横 105.1 裏面記載：昭和 22 年作 (復興)

調書内容

上部に折れ、欠け、破れ有 下部に折れ、破れ、欠け有 穴、めくれも数か所有